

釈迦堂と小池

匠 磋 探 訪

198

秋が深まる中、周囲に溶け込み趣を増す寺社が市内に何カ所かあり、内山（豊和地区）妙広寺の釈迦堂はその代表にあがるでしょう。

三間四方寄せ棟造りてかやぶき屋根の堂は、18世紀の特徴を随所に備えた建造物として市文化財に指定されました。

このお堂は鎌倉時代以降、この地域の仏教の変遷とも深い関わりがあり

ます。

建長年間（1249～56年）に楠木村（旭市）や福岡村（そうさぬくもりの郷周辺）、米倉村（中央地区）で浄土宗が広まりました。内山にもその影響が及び、釈迦堂は当初阿弥陀三尊像をまつる阿弥陀堂だったと考えられます。

当時の堂の本尊は1290（正応3）年に「匠磋北条大寺郷の平次太郎入

妙広寺の釈迦堂

道」が施主とな

り造立した阿弥陀三尊（現在は香取市府馬・修徳院蔵）が想定できるかも知れません。堂は東

向きに建てられ向かって右側に小池があり、夕日は堂の背後に沈む浄土式庭園の名残だった

のかも知れません。こうした例は、米倉・西

光寺、貝塚（豊栄地区）寶光寺にも見られます。

その後、1390（明德元）年から1414（応永21）年にかけて「北条内山真乘院道場」「内山幸福寺」との記録が見られ、同所で学んだ僧が市内や旭市の真言宗有力寺院を開きました。

内山・妙広寺は現在日蓮宗寺院で、1437（永享9）年に真言宗から改宗しました。おそらくこの時に堂の本尊が阿弥陀三尊像から釈迦如来像に変わり、堂の位置や小池はそのまみにされたと考えられます。

妙広寺、妙典寺のある場所は1180（治承4）年ごろの「匠磋北条内山館」だったとも考えられます。

釈迦堂手前の小池のそばに芭蕉の句碑「名月や池をめぐりて夜もすがら」があり、池の周りのススキが揺れていました。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

関秘書課広報聴班

☎73・0080

